

**令和6年度
地域循環共生圏づくり支援体制構築事業**
中間支援振り返りシート（2025.3）

活動団体の活動におけるテーマ

『 21世紀型“さとうみエコシステム” 』

活動団体の活動地域 ： 広島県江田島市

活動団体名 ： 一般社団法人フウド

中間支援主体名：一般社団法人HLL

活動計画（概要）

地域循環共生圏の構築を通じてありたい地域の姿

21世紀型“さとうみエコシステム”

古くからの営みと新時代の社会経済の組み合わせによって里海の風土と生態系がより良い状態で循環し続けるとともに、人材の還流と経済の循環によって適切な人口構造が保たれる、自然にとっても人にとっても幸福度の高い島

地域に必要なプラットフォームの体制や仕組み

ローカルSDGs事業として取り組む内容

域内外の多様なステークホルダーが連携・協働を図り、自立分散型の持続可能な地域づくりを進めることが重要。事業実施主体を伴走支援する組織と事業を審査し投資する機関を構築し、域外からの資金獲得、人づくりと仕事づくりの好循環を目指す。

- ①豊かな海づくり事業～ブルーカーボン及びふるさと納税制度を活用したエコシステム
- ②“さとうみ”ブランドによるツーリズム&研修事業
- ③エシカルフード事業
(江田島産の食品のブランド化)

地域の現状

- ・観光等での消費は流入も、**投資と経常収支では流出が顕著**
- ・**移住者等**、飲食店や宿泊施設を開業する個人や事業者の増加。**社会増→メディア露出増**
- ・**まちづくりの動きはあるものの、各ステークホルダーの横の連携が不十分**
- ・**里海学習の推進**、海岸清掃を行うボランティア団体や個人の増加
- ・**豊富な水産資源**、主な域外所得となる造船業や水産業が強みであるが、**海ごみやCO2排出量の問題**も。
- ・コロナ禍を経て回復傾向にある観光業
- ・とどまらない人口減少と少子高齢化

2026年度末の状態目標

- 地域循環共生圏を実現するための事業の伴走支援を行う組織と事業の審査と投資をする機関が立ち上がっている状態。
- 上記機関をはじめ、各ステークホルダーも含めた、エコシステムの推進体制（＝プラットフォーム）が構築されている。
- ローカルSDGsとなる事業が3つ以上実証段階に入っている状態。

2025年度末の状態目標

- 地域循環共生圏を実現するための事業の伴走支援を行う組織と事業の審査と投資をする機関の立ち上げ準備が整っている状態
- 各ステークホルダーとビジョンが共有され、エコシステムの推進体制構築に向けて準備が整っている状態。
- ローカルSDGsの事業計画が完成している状態。

2024年度末の状態目標

- 地域のビジョンが可視化され、ステークホルダー間で共有されている状態。
- ステークホルダーの構造が可視化され、プラットフォームのあり方が言語化されている状態。
- ローカルSDGsの事業構想が練られている状態。

■見立て

域内外との豊富なネットワーク
 = **プレイヤー兼 中間支援的ポジション**
 →地域のしがらみを意識し、 баланサー
 (調整役) になってしまいがち
 = 思考・推進力にブレーキかかりやすい

→対応方針

- ①活動団体の、中間支援的ポジションを肩代わり
- ②活動団体の、プレイヤーとしての力を引き出す

■打ち手

- 対応方針①を受けて
- └ 中間支援団体の中間支援的振る舞い
 (俯瞰的に見る、全体を調整する)
 - └ PBL。動きながら、学び、整える
 - └ **多様な、自立分散の動きの交通整理**
 (意味付け、関連付け)
- 対応方針②を受けて
- └ **活動団体とのカベ打ち**
 (やりたいことの言語化、視覚化)
 - └ ステークホルダーとの話し合いの同席
 - └ **先行事例への視察 (AMAホールディングス)**

■中間支援機能の強化・振り返り

【相談したいこと】

- ・ 先進事例の紹介
 (例) AMAホールディングス
 - └ 立ち上げ時の苦労
 - └ 現状とそれに対する評価 (自己、他者)
 - └ AMAホールディングスを参考にして
 立ち上げられた他地域の事例

【支援のビジョン】

【事業/活動】

PBL [Project Based Learning]

【活動的基盤】

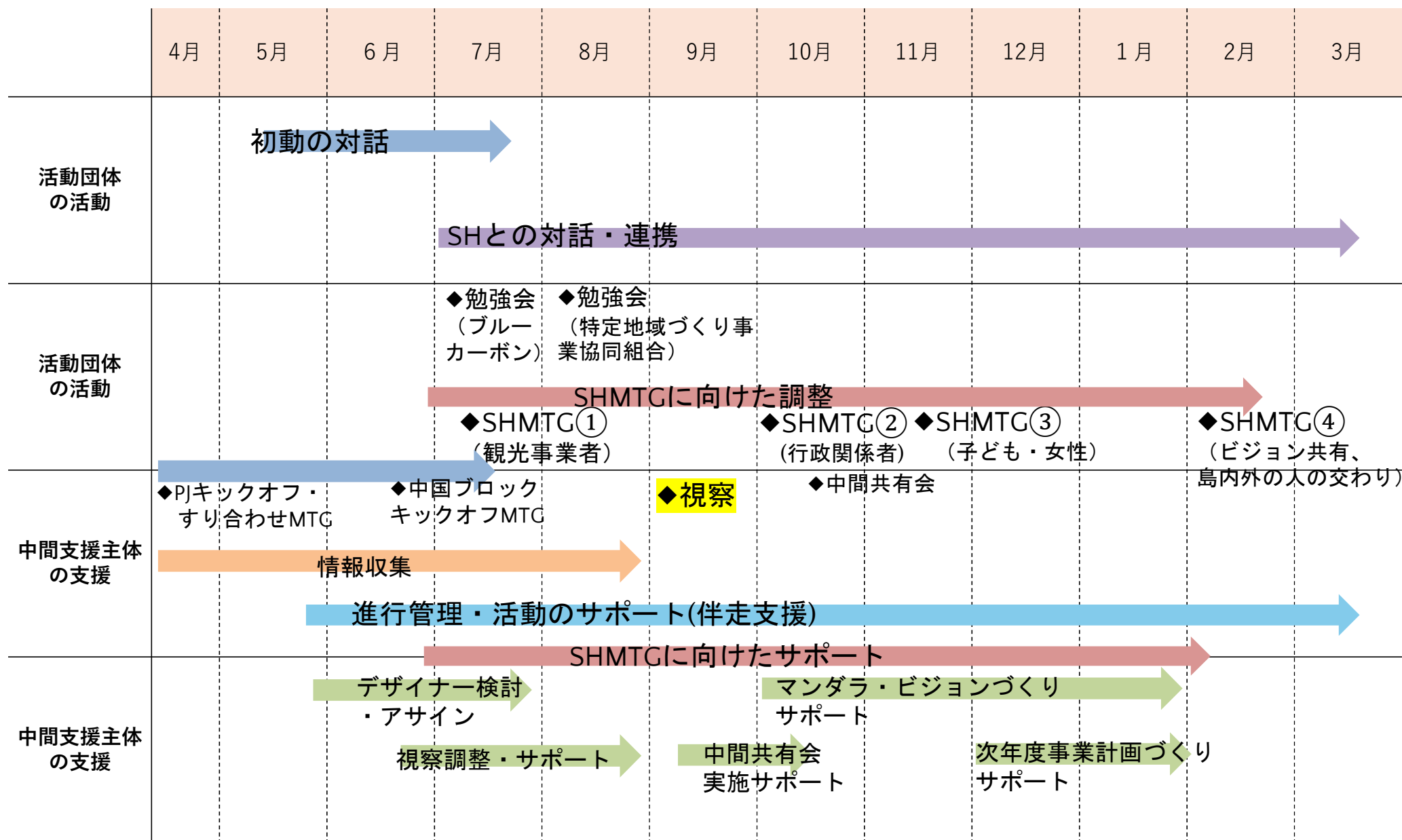
コレクティブかつ自立分散な活動促進の仕組みづくり

【理念的基盤】

共通ビジョン/バリューづくり

活動・支援のプロセスの振り返り

■R6年度活動・支援内容



活動・支援のプロセスの振り返り

■今年度、地域循環共生圏づくりのポイントとして注力したアクションサイクル①

事業を生み出す > 先進的な事業を学ぶ機会をつくる

中間支援主体の支援

活動団体の取組

● 上記アクションサイクルの取組を活動団体が進めるにあたっての見立て

- ・活動団体からの強い要望で選定。同じ「島」という地理的条件と投資×人材育成というモデルが参考になる点が多いと判断
- ・活動団体と中間支援主体がともに時間を過ごし、学べる機会は非常に貴重で最大限生かす

● 具体的な支援内容（打ち手）

- ・視察参加者向け事前オリエンや移動時間での活発なコミュニケーション

● 打ち手による活動団体の変化（意識・行動・活動の進捗）

- ・コアメンバー間の共通理解や信頼性が深まり、一体感が高まり、チームでの事業推進力へと繋がっていった。

● 中間支援主体としての気づき・成長

- ・視察のチームビルディング効果の高さ

● 活動名・時期

- ・海士町への視察（9月上旬）

● なぜそれを実施したのか（実施目的）

- ・未来共創基金を中心とした、地域づくりのための資金循環（投資）や人材育成の方法を学び、島の中で小さな事業を大きくしていく仕組みづくりに生かすため

● 実施したことによって共生圏づくりにどのような変化が起きたか（活動団体自身の変化・周囲の変化等の共生圏づくりに関わる進捗）

- ・基金の理解だけでなく、その背景となる海士町における地域づくりの行政（半官半X）と民間（攻める行政）との関係性や、資金や人材の還流の大きな仕組みなど、自分たちが目指すことを先行して実現しているモデルと実際に現地で体験することができた。その結果、考える時のスケール観が現実的になった。
- ・稼ぐことへの意識が高まった

活動・支援のプロセスの振り返り

■今年度、地域循環共生圏づくりのポイントとして注力したアクションサイクル①

体制を整える > プラットフォームの機能や取組などの全体像を整理する

中間支援主体の支援

活動団体の取組

● 上記アクションサイクルの取組を活動団体が進めるにあたっての見立て

・多様なステークホルダーを最初から巻き込んだ熱量の低い・包括性の高い形ではなく、少数でも当事者性と熱力が高い実態に即した形の方が推進力と将来性を感じた

● 具体的な支援内容（打ち手）

・話し合いの場を設けての活動団体との対面での意見交換。また専門家にも相談した。

● 打ち手による活動団体の変化（意識・行動・活動の進捗）

・当初「地域のための仕組みをつくる」といった俯瞰的な視点や包括的な組織イメージが先行し、ぎこちない進め方だったが、活動メンバーの特徴でもある「まず自分たちが楽しむ」が最大化され、前向きに取り組めるようになった。

● 中間支援主体としての気づき・成長

・時には、現場感に基づく方向転換も重要

● 活動名・時期

・地域プラットフォームのあり方と本事業推進の方向性の転換（視察後9月中旬～）

● なぜそれを実施したのか（実施目的）

・当初、プラットフォーム＝地域の多様なステークホルダーを包括した1つの組織体、といったイメージで進めていたが、視察を経て同行したメンバー内での熱量が高まる中、小さくともアクティブなメンバーとのやりとりをベースに、小さな渦をつくるように周りを巻き込むスタイルに方向を転換

● 実施したことによって共生圏づくりにどのような変化が起きたか（活動団体自身の変化・周囲の変化等の共生圏づくりに関わる進捗）

・コアメンバーの心情に沿ったより当事者性の強い、地域をつくる一主体者として動いていく方向性とする事で、無理なく円滑に事業推進をすることができるようになった。

活動・支援のプロセスの振り返り

- （特に前2スライドの支援を実施するにあたり、）今年度、力を入れて取り組んだ中間支援は？（中間支援機能チェックリスト.xlsxより上位3つを選んで記入）

協働ガバナンスの項目	中間支援機能	項目（番号）	支援をしたタイミング等
チェンジ・エージェント機能	プロセス支援機能	(2) ①	4～5月、9月
チェンジ・エージェント機能	資源連結機能	(2) ④	通年
チェンジ・エージェント機能	問題解決提示機能	(1) ①	通年

● 共生圏づくりを進めるために、活動団体の能力をどう引き出せたか

活動団体の代表者は地域づくりコンサルの経験者で、整理・構造化する能力は高かったが、多動的な部分があり、自身でも自分たちが目指している全体像を整理できてなかった。拙いながらも、こちらから全体像を整理してみ、投げかけ続けることで、最終的には活動団体自身でマンダラを描き、棚卸し、見える化することができた。

● 中間支援主体として向上したと思う中間支援機能

同じ目線・思考・視座で一緒に考える壁打ちを中心とした伴走支援や、活動団体が持っていない資源、特に当団体の強みであるソーシャルキャピタル（地域の多様な人とのつながり）を活かした資源連結は、活動団体からも評価してもらえ、力を出せた部分だと感じる。

● R6課題だと感じたこと

- ・マンダラやステークホルダーマップなど抽象性の高い成果物を求められる中で、本事業のために作成するのではなく、自分たちの必要性に合った形でつくっていきたいと当初から考えていたが、それが具体的にはどういう形なのかが見出せず、進行に時間がかかった。
- ・資源連結や伴走支援など主体者のエンパワーに対しては力が発揮できる一方で、事業化やそこに必要なビジネスモデルのあり方などは、突っこんだアドバイスができなかった。

地域循環共生圏づくりに向けた次のアクション

- **地域循環共生圏づくりのために、どのような中間支援機能を発揮できるか。R7～中間支援主体として今後どのようなになりたいか。**

- ・地域の地元のプレイヤーとともに自然・経済・社会の問題を同時解決しながら進めるオーダーメイドの地域づくりに応えられる中間支援主体を目指す。

- ・事業づくりとその推進がテーマとなり、いかにカタチをつくり、実績として見せていくことができるかが重要となる。必ずしも得意な分野とは言えないため、そのあたりのノウハウを持つ専門家と協働し、学びながら、現在の取り組みにスムーズに結びつける役割と事業推進を果たしていきたい。

- **活動団体がアクションサイクルを回せるようにするための次年度の見立て・打ち手（具体的な支援策）**

今年度取り組んだアイデアの棚卸やコンセプトづくりは基盤として必要である一方、注力し続けると関係者の熱が冷め、推進力がそがれてしまう懸念がある。

→事業を動かし実体をつくり、内外にそれを見せていき、取り組みの意味を実感・共有する。

社会的価値との関連が強い事業（海づくり）については伴走支援できる一方、経済的価値を出していくことが求められる事業づくりについては、専門人材を早くから組み込み本事業全体の推進力が落ちないように気を付ける。

- **地方・全国事務局にサポートしてもらえると嬉しいこと**

- ・他地域、他団体との意見交換・現地視察の機会と金銭的サポート
- ・他地域事例の勉強会
- ・経団連企業や森川里海など環境省の事業で関連のある企業とのマッチング機会や取り組みに関する情報提供、本事業と結びつきそうなニーズの調査
- ・広報媒体への露出支援